

日本と中国の地理書の比較思想史的研究

Ideological Studies on the Geographical Descriptions in Japan and China.

プロジェクト代表者: 薄井 俊二 (教育学部・教授)

USUI SHUNJI

1. はじめに—プロジェクトの概要—

本プロジェクトは、中世期に日本と中国の両国で盛んに行われた地理書編纂の諸相を比較検討し、日中両国における地理的な世界把握の様相と、その交流の有様について、明らかにすることを目的とするものである。

より具体的な課題としては、中国側の問題としては、「漢書地理志」のような総合的な地理書から、「廬山略記」「天台山記」といった山岳地志のような新しいタイプの地理書が登場してくる様相について、道教・仏教といった新たな精神的な動きと関連させながら明らかにしていくことがあげられる。日本側の問題としては、「風土記」編纂の背景に、中国地理書がどのように関わっているのかを、日本へ将来された地理書の様相を明らかにすることを通して検討することがある。

古地理書の研究は、地理学・歴史学・書誌学など複数の分野にわたる知見が求められるもので、日中いずれの場合でも手薄な分野であった。本プロジェクトにおいては、埼玉大学教育学部に所属する、異なった専門領域を有する研究者が連携することにより、こうした壁を乗り越えようとするものである。

プロジェクトの構成メンバーは、代表・中国思想資料担当の薄井俊二、中国書写資料担当の大橋修一、地理思想資料担当の田村均、中国歴史資料担当の小林聡、日本古典資料担当の飯泉健司の5名である。

本プロジェクトは上記のような目的・課題に沿って進められたが、単年度で実施するものではなく、数年間にわたって継続的に研究を進めるべきものである。そこで、本報告においても、以前から継続的に行ってきた研究の成果をおりませつつ、平成17年度に行った研究成果を中心に概略を報告することとする。

2. 中国地理書の課題—伝存状況調査—

内容の検討に先立って、中世期までの古地理書の伝存状況を調査しておく必要がある。本報告では、山岳関係の地理書に限って、唐代くらいまでのものと思われるものの、伝存状況を調査し、まとめたものが下記の表である。

	王朝	撰者	文章名	作成時期	時期の種類	事跡等
1	1 漢	馬第伯	封禪儀記	散	56	儀礼举行
2	2 西晋	傅玄	華嶽銘序	散	217-278	撰者生没年
3	2 西晋	徐靈期	南嶽記(南岳記)	散	287	撰述年?
4	3 東晋	葛洪	幕阜山記	散	283-343	撰者生没年
5	3 東晋	王彪之	廬山記	散	345-357	撰者事跡
6	3 東晋	支遁	天台山銘序	散	314-366	撰者生没年
7	3 東晋	袁彦伯	羅浮山記	散	328-376	撰者生没年
8	3 東晋	羅含	湘中山水記	散	301-385	撰者生没年
9	3 東晋	王嘉	名山記(拾遺記)	存	-390	撰者没年

	王朝	撰者	文章名	作成時期	時期の種類	事跡等
10	3 東晋	伏滔	遊廬山序	散 317-396	撰者生没年	
11	3 東晋	廬山諸道人	遊石門山詩並序	存 400	本文に明記	
12	3 東晋	王珣	虎丘山記	散 350-401	撰者生没年	
13	3 東晋	袁山松	句將山記	散 -401	撰者没年	
14	3 東晋	袁山松	宜都山川記	散 -401	撰者没年	
15	3 東晋	顧愷之	虎丘山序	散 344-405	撰者生没年	
16	3 東晋	劉遺民	廬山記	散 352-410	撰者生没年	
17	3 東晋	慧遠	廬山略記	存 334-416	撰者生没年	
18	3 東晋	慧遠	遠法師遊山記 [法師遊山記]	散 334-416	撰者生没年	
19	3 東晋	張野	廬山記	散 350-418	撰者生没年	
20	4 劉宋	謝靈運	遊名山志	散 385-433	撰者生没年	
21	4 劉宋	謝靈運	山居圖	散 385-433	撰者生没年	
22	4 劉宋	劉澄之	永初山川古今記	散 477	撰者任官	
23	4 劉宋?	周景式	廬山記	散 晋~齊?	撰者事跡	
24	4 劉宋?	張元之?	吳興山墟名	散 晋?	撰者任官	諸説あり
25	5 齊	宗敬微	衡山記	散 -480	撰者没年	
26	5 齊	宗敬微	廬山記	逸 -480	撰者没年	
27	6 梁	陶弘景	尋山誌	存 452-536	撰者生没年	
28	8 北魏	盧元明	嵩高山記	散 534-537	当該年記事	
29	9 北齊	邢子勵	龍山記	散 隋以前	北堂所収	北齊?
30	10 北周	樊文深	中岳潁川志	散 572	撰者事跡	
31	11 六朝?	劉薈	鄒山記	散 北魏以前	水經注所収	
32	11 六朝?	竺法眞	登羅山疏	散 北魏以前	齊民所収	
33	11 六朝?	不明	西岳記	散 隋以前	北堂所収	
34	11 六朝?	不明	廬山記	散 隋以前	北堂所収	
35	11 六朝?	不明	廬山南嶺精舍記	散 隋以前	北堂所収	
36	11 六朝?	殷斌	武當山記	散 隋以前	北堂所収	
37	11 六朝?	不明	名山略記	散 隋以前	芸文所収	
38	11 六朝?	不明	泰山記	散 隋以前	芸文所収	
39	11 六朝?	不明	荊山記	散 隋以前	芸文所収	
40	11 六朝?	不明	華山記	散 隋以前	芸文所収	
41	11 六朝?	傅(徐)先生	南岳記	散 隋以前	初学所収	
42	11 六朝?	黄閔	神壤記	逸 隋以前	隋志記載	
43	11 六朝?	張光祿	華山精舍記	散 隋以前	隋志記載	
44	12 唐?	灌頂	南嶽記(章安山記)	逸 561-632	撰者生没年	
45	12 唐?	不明	南岳並天台山記	逸 唐以前	最澄将来	
46	13 唐	慧祥	清涼山伝	存 649-683	撰者活動年	
47	13 唐	王方慶	九嶽山記	逸 -702	撰者没年	
48	13 唐	盧鴻	嵩山記	逸 713-717	撰者事跡	
49	13 唐	李邕	南岳記	逸 675-747	撰者生没年	李北海?
50	13 唐	元結	五嶽諸山記?	逸 723-772	撰者生没年	
51	13 唐	元結	九疑山記	存 766	撰述年	
52	13 唐	神邕	天台山図	散 710-788	撰者生没年	
53	13 唐	不明	泉山記	散 766-779	当該年記事	
54	13 唐	陸羽	顧渚山記	逸 -804	撰者没年	
55	13 唐	徐靈符	天台山記	存 825	撰述年	
56	13 唐	李歸一	王屋山記	存 876	撰述年	
57	13 唐	李冲昭	南嶽小録	存 901-904	撰述年	
58	13 唐	杜光廷	武夷諸山記	逸 850-933	撰者生没年	
59	13 唐	杜光庭	青城山記	存 850-933	撰者生没年	
60	13 唐	杜光庭	修青城山諸觀功德記	存 850-933	撰者生没年	
61	13 唐	令狐見堯	玉筍山記	散 唐	直齋記載	
62	14 唐?	徐道覆	羅浮山記	散 唐以前	御覽所収	
63	14 唐?	不明	五嶽眞形圖	散 唐以前	御覽所収	
64	14 唐?	不明	仙人採芝圖	散 唐以前	御覽所収	
65	14 唐?	不明	恒山記	逸 唐以前	御覽所収?	

	王朝	撰者	文章名	作成時期	時期の種類	事跡等
66	14 唐?	不明	恒山圖經	散 唐以前	御覽所収?	
67	14 唐?	不明	羊頭山記	散 唐以前	御覽所収	
68	14 唐?	不明	烏嶺山記	散 唐以前	御覽所収	
69	14 唐?	不明	衡山圖經	散 唐以前	御覽所収	
70	14 唐?	宗淵	麓山記	散 唐以前	御覽所収	
71	14 唐?	不明	巴南山川記	散 唐以前	御覽所収	
72	14 唐?	不明	三晉山險記	散 唐以前	御覽所収	
73	14 唐?	不明	廣州山川記	散 唐以前	寰宇所収	
74	14 唐?	李氏	宜都山川記	逸 唐以前	新唐志記載	
75	14 唐?	張密	廬山雜記	逸 唐以前	新唐志記載	
76	15 趙宋	陳舜俞	廬山記	存 -1076	撰者没年	

表中の、文章名の後ろに付した記号の意味は下記の通りである。

「存」: ほぼ全文が伝存するもの。

「散」: 一部分もしくはかなりの部分が散逸したが、断片などが伝存するもの。

「逸」: 本文は全て散逸したが、目録などにより、その書物が存在したことが確認できるもの。

この表を眺めて、いくつか予備的な考察を加えてみる。

まず、山岳地志としては、漢代の「封禅儀記」が最初のものということが指摘できる。この書は、後漢の光武帝の時に举行された封禅という山岳における儀礼の記録であり、後世には起居注の類として捉えられることも多い。その後封禅が行われなかったこともあり、この書に続く山岳地志は登場していない。やはり、山岳を記述の対象とすることが定着してくるのは、西晋以降、則ち魏晋南北朝期以降であることが分かる。

次に、地域的には、晋宋代あたりのもものでは、長江の中・下流域の南朝の勢力範囲のものが多いことが指摘できる。中でも、廬山(現江西省)を対象とするものが数多くあるのが目立っている。これには、東晋末に、廬山で活躍した慧遠らが、集団的な著述活動を展開していたらしいことと関連があろう。廬山は山岳遊行のメッカのひとつとなっていたものようである。

三点目に、山岳地志の撰述者として、道教の道士や仏教の僧侶が多いことも指摘できる。実際に山岳に分け入ったのはこうした宗教者が先で、一般の文人たちの入山はそれに促されてのことと思われる。宗教者たちは、初めは、山岳を、神仏などとの交流ができたり、霊妙な力を持つ「仙薬」が採集できる「聖地」と捉え、山に入っていく。その段階では、彼らにとって、山岳は危険な場所であり、常住すべき所ではなかった。ところが、とりわけ豊かな江南の山岳へ入った者の中には、その静謐で美しい環境そのものに心ひかれ、山岳を修行の場とし、山中に活動の拠点を構えるものが出てくる。そして山岳そのものや山岳遊行に関する文章を記すことが、宗教者たちの間で流行のようになってくるのである。

最後に、まとまった長文の山岳地志は唐代になって漸く登場していることも指摘しておく。ほぼ全文を残す、東晋慧遠の「廬山略記」や梁陶弘景の「尋山志」などは短文の作品であり、このころのものは、ほとんどがそうであったと予想される。かなり長文の作品としては、伝存するものとしては、唐代の慧祥の「清涼山伝」、徐靈府の「天台山記」、李冲昭の「南岳小録」等が数えられる。これらのについては、個別に詳細な検討が加えられる余地がある。

今後は、断片的な資料から分かることと、全文を残す資料を丁寧に読み解く作業が必用になるだろう。

3. 日本の地理書の課題—「日本国見在書目録」について—

日本における地理書の問題は、「風土記」等の日本で編纂された地理書を直接検討することの他に、そうした地理書編纂に影響を与えたと思われる、中国からの将来典籍の研究が必要だろう。しかし、僧侶による将来典籍目録はかなりの数が残されているが、それらにおいては仏教関係書である内典が中心で、地理書のような外典についてふれるものは極めて少ない。また遣唐使や留学生など、僧侶以外の渡航者も数多くおり、彼らも将来目録を作成したであろうと予想されるが、残念なことにそれらは全く伝存していない。それゆえ、当時どのような地理書が将来されたかを探るのはなかなか難しい、というのが現状である。そのような中で、平安朝あたりの書物（外典）の存在を伝えてくれるものに「日本国見在書目録」がある。

この目録は、寛平年間（889-898）に藤原佐世が冷泉院の勅命を受け、当時伝存した漢籍を調べまとめたものであるといわれる。現存するテキスト（室生寺蔵写本）には1500余の書名が掲げられている。項目立ては、隋書経籍志のそれを参照にしたともいわれるが、「易家」等の儒教経典から始まり、「正史家」等の歴史書類、「儒家」等の諸子類、「楚辞家」等の文学関係の書籍まで四十家を立てるが、その中に「〔廿一〕土地家」がある。ここには地理書とおぼしき書名、三十七点が収録されている。

まずは、この目録に収録されている地理書について、その日中における伝存状況を調査することが課題となるだろう。

以下、「日本国見在書目録」の「土地家」の本文を掲げる。

- 1 「山海経廿一卷〔郭璞注見十八卷〕」
- 2 「——賛二卷〔郭璞注〕」
- 3 「——抄一卷」
- 4 「——略一卷」
- 5 「——図賛一卷」
- 6 「海外記〔四十〕卷」
- 7 「黄圖一卷」
- 8 「洛陽宮殿簿一」
- 9 「三国地方経一」
- 10 「神異経一〔東方朔撰晋張華注〕」
- 11 「十洲記十〔道撰〕」
- 12 「三輔故事二〔晋世撰〕」
- 13 「歴国四〔积法成撰〕」
- 14 「輿地志〔三十〕〔陳顧野王撰〕」
- 15 「括地志一〔魏王泰撰元数六百卷圖書録只載第一卷〕」
- 16 「坤元録百卷」
- 17 「古国都記八」
- 18 「高麗国記四」
- 19 「十道志十二」
- 20 「両京新記四〔韋述撰〕」
- 21 「揚洲圖経一」
- 22 「濮陽縣圖経一」
- 23 「唐洲圖経十卷」
- 24 「越洲都叡府圖経二」
- 25 「海洲圖経一」
- 26 「南岳記一卷」
- 27 「洲縣圖経〔関内道河南道河東道河北一山南一隴右一劍南南淮南一嶺南道各一卷〕」
- 28 「方尺圖一」
- 29 「遊名山志一〔謝靈運撰〕」
- 30 「西域記十三〔玄奘撰〕」
- 31 「関東風俗傳十〔宋孝王撰〕」
- 32 「苧浮提記二」
- 33 「釋迦方志〔見道撰〕」
- 34 「波羅門摩伽陀等国圖記一」
- 35 「西明寺圖讚四」
- 36 「建国論二十六」
- 37 「国圖一」

この他「土地家」ではないが、地理書に含めうるものとして、下記のものがある。

「霸史」：「趙書十卷」「華陽国史十二卷」「十六国春秋百卷」

「起居注」：「穆天子伝六卷」

「雑伝」：「三輔決録七卷」「荊楚歳時記一卷」「清涼山伝」